

ゾラとトウェインの狭間で：

トロロップの『この世の生きかた』における投機と信用のナショナリズム

榎本 洋

序・

1875年発表のトロロップの『この世の生きかた』は投資と株式市場をテーマに扱っており、多産な作家の初期の読者には余りなじみのないテーマだったと思われる。1873年の時点で‘financier’という言葉は聞きなれないものだったようだ。しかし、現実はかなり先んじていたようにメルモット(Augustus Melmotte)を思わせる詐欺師が数多くみられた。「鉄道王」として有名なジョージ・ハドソン(George Hudson)、フオーントラロイ(Henry Fauntleroy)、サドラー(John Sadleir)はその一例である。それゆえ、株式市場の投機というテーマは同時代とは限らず、50年代以来のテーマである。ディケンズの『リトル・ドリット』(1857)、ロバート・ベルの『金の梯子』(1850)リードの『ダヴェンポート・ダン』(1859)などがあるが、これにトロロップの『三人の役人』(1857)や40年代のゴア夫人『銀行家の妻』(1843)が加わる。こうした文学テキストは従来見向きもされなかったが、経済的な文脈において文学テキストをみる近年の研究で新たな注目を浴びつつある。オルティック(Altick)の研究はフランスのバルザックやゾラ同様に、ヴィクトリア朝の小説が投機、破産、詐欺など金銭にまつわる経済的スキャンダルに事欠かぬことを教えてくれる(Altick, 638-677)。更にブルーナ・イングラオ(Bruno Ingraio)が指摘している通り、経済状況の危機は感情表現を表す語彙、‘panic’、‘convulsion’、‘revulsion’、‘distress’といった感性と感情の混乱を表す心理学、医学などの豊富な語彙を頼りに、金融の脆弱さを示すのが定番になっているという(Ingraio, 19)。

こうした投機・金融危機には、当事者の行く末において同工異曲のイメージが共有されている。派手な投機行為は主人公の成功と蹉跌と破滅と続き、最後は死または逃亡によって締めくくられる。それは怠惰、腐敗、そして貪欲といった負のイメージと結びつき、時代の道徳的退廃を語る格好の材料となる。貨幣の信用性は、制度的、社会的な変化により揺らぐが、ラヴェット(Lovett)は1855年から56年の「有限責任法」(Limited Liability Act)の法施行がそうした傾向に拍車をかけたことを指摘する(Lovett, 691)。この「有限責任」とは、会社・企業に対する共同出資とその責任の様態の在り方を示すもので、18世紀の無限責任という共同出資の責任とは異なり、19世紀の近代以降の企業経営と市場拡大を決定づけたものといえる。しかしながらラヴェットはこの制度変革が市場の拡大化というファイナンスの重要局面をもたらしたと指摘しているにもかかわらず「有限責任法」との関りは示されていない。本発表では、この1855年の「有限責任法」の意味と、その思考と施行がもたらした波紋から始めたい。いわゆる「有限責任法」論争である。それが金融制度の信用に、いかなる影響をもたらしたのか。それらをメルモットの「犯罪行為」を具体的な詐欺行為と鉄道会社の経営のありかたを絡めて考察する。最後にメルモットの投機行為の国際的な金融のネットワークにおける位置づけとイギリス社会の関係について触れる。

有限責任論争

無限責任とは企業が負債を負って倒産したとき、出資者は個人財産のすべてを投げ出して、その責任処理にあたるということであり、この場合、出資者はパートナー・シップに基づく近親者という場合が多い。一方の「有限責任」は企業が倒産したとき出資者は出資額の範囲内で責任を負わされるだけである。19世紀になると認知される有限責任法は、株式会社の誕生に契機となり、金融資本への道を開く。しかし、制度として1855年に導入される際、様々な議論が取り交わされる。これらの論争は、収入の利益分で生活する年金生活者、いわゆるインカム・ゲインで生活する弱者の声を反映したものではなく、主に富裕層が資産運営に用いるキャピタル・ゲイン、もしくはその風潮をまねることにに対する懸念を表明したものと思われるが線引きは明確ではない。いずれせよ、有限責任論の導入は小口の投資家の増大という風潮に合致しているものの、借金の踏み倒しを当て込んで多額の資金を投資するという、ギャンブルめいた投資(事実上の投機だが)を容認し貸し手と借り手の信頼関係を損なう事態を招くのではないか、という懸念があった。

根底にあるのはイデオロギー的な反発である。商業上またはアントレプレナーシップにおける成功は、人物の徳の反映ともいえる勤勉、誠実さ、人格の陶冶によりもたらされるというサミュエル・スマイルズ流の『自助論』のイデオロギーであり、その否定である。投機により一攫千金を狙うという風潮が蔓延すれば、人物の徳が反映された人間的な価値観に基づく労働観は否定される。堅実な労働に変わって、投機的な運と偶然が支配する不安定な、予測不能な人生が待ち受けるものとなる。メルモットの台頭と成功がこうした反発をもたらしたのだ。

メルモットの犯罪

メルモットの事業は表向き信用に拠るはずだが、実際は詐欺行為で財を成してきた。ロンゲスタッフ氏のピッカリングの土地の買収がらみの偽造の署名のため、それが紳士的な行為に反するというで自殺に追い込まれる。それ以前にメルモットは、手に入れた土地の代金を鉄道株で間に合わせ、またその土地を抵当に入れてしまう。そのために売却に同意したとの署名が必要となり、売却に反対するドリー・ロンゲスタッフの署名を偽造する。一見するとメルモットの犯罪は署名の偽造のみだが、鉄道会社の経営もメルモットの詐欺性を示唆している。鉄道敷設は 1840 年代に流行したが、アメリカも同様で、こちらは世紀末まで続く。テキストではアメリカの資産家フィスカーの助言により立ち上げられたもので、ソールト・レイク・シティーからサンフランシスコを経てメキシコまで鉄道を敷設する計画だったが実体はない。目的は鉄道敷設ではなく、会社そのものを立ち上げ、そのための資金を集めることだからだ。つまりこの鉄道会社は株式を新規上場して、その株価を操作することで利益を上げている会社で、鉄道事業そのものは目的としない。しかも株価操作で、利益を得るのは株主のみであり、サー・フェリックスやニッダーデイルも出資者であるにもかかわらず、一切の情報から遮断されており株の買い付けも断わられてしまう。役員会も形骸化しており、メルモットの右腕のマイルズ・グレンダルが簡単な報告書を読み上げるだけである。また他の役員は、メルモットの「依頼」で引き受けたものの、会社の経営実態には関心がない。経営と株主の乖離という事態は、ディケンズの『家庭の言葉』でも批判されている。こうして鉄道会社の詐欺的な実態が示唆されるが、それは会社外にも蔓延している。ビアガーデン・クラブでの賭博の不正行為とアナロジーにある。テキストではクラブでのカードゲームのやり取りが頻繁に出てくる。象徴的なのはメルモットの秘書のグレンダルがカードゲームで不正を行い、なおかつ、ゲームでの借金を借用証書として要をなさない手形で借金を返済しようとしてサー・フェリックスらに損害を被らせる。グレンダルの「紙幣」はメルモットの株券と同じく、金が金を生むという循環から外れた、信用不在の似非貨幣である。

大西洋の両端で

メルモットが手掛けた鉄道会社の事業はメルモットの死で突然の終焉を迎えるが、彼の起業家精神は海を越えて、フィスカーと娘のマリーにより展開される。つまりイギリス本国で根付かなかった投機はこうして新大陸に活路を見出すことになる。マーク・トウェインが『金メッキ時代』(1873)でアメリカの起業家精神として投機を評価しているのを我々は気づかされる。メルモットの没落後、メキシコ鉄道株は暴落するが、フィスカーは新大陸でマリーとともに企業活動を再開する。その意味では真の主人公はメルモットというより、フィスカーと思われる。そもそもヨーロッパのユダヤ人を思わせるメルモットの周囲にはユダヤ人と思しき実業家が多数登場していた。しかし、これらの人物はメルモットの死とともに新大陸に渡るか(クロス)、損益で姿を消す(銀行家ブレグハート)。メルモットはロスチャイルドをモデルにしたと思われるが、同じような主人公をエミール・ゾラが『金』(1891)でサッカーという鉄道事業会社を運営する相場師で取り上げている。

彼らが去った後のイングランドでは、ポール・モンタギューとヘッタ・カーベリーが結婚し、サフォークの地所の経営にあたる。モンタギューは従来の土地貴族とは異なり、シティーと繋がりのある土地貴族であり、金融にも明るい。モンタギューのような新興の土地貴族の出現により、イングランドでも新たな信用の形が創造されたと思われる。つまり、従来の閉鎖的な価値体系はいずれ資本の介入により、同質性を失う。それがもたらされるのが投機のグローバル化と思われるが、イングランドもそうした傾向に無関係でないという、新たな価値体系を示唆したのがヘッタ・カーベリーとモンタギューの繋がりである。二人が結婚することで(土地を担保とした)このメロドラマ的なプロットに貨幣と投機の信用が担保されるのである。ただ、テキストの真価が問われ理解されるのは、これから 100 年後の 1980 年代に「新自由主義」的な風潮が強くなって以降だと思われる。

参考文献

- Altick, Richard. *The Presence of the Present*. Ohio State University, 1991.
- Bagehot, Walter. "The Panic." [1866] *The Financial System in Nineteenth-Century Britain*. Ed. Mary Poovey. Oxford U.P., 2003.
- Ingrao, Bruna. "Narratives of passions and finance in the 19th century." *Economics and Literature: A Comparative and Interdisciplinary Approach* Ed. Cinla Akdere and Christine Baron. Routledge., 2018.
- Lovett, Denise. "The socially-embedded market and the future of English capitalism in Anthony Trollope's *Way We Live Now*." *Victorian Literature and Culture* 24 (2014):691-707.
- Trollope, Anthony. *The Way We Live Now*. Oxford University Press, rep.1991.